

ランバレネ

Lambaréné

わたしは、ランバレネの地で求め続けてきたものを見出しました。それは、愛情と信頼と寛容の心です。

シュバイツァー

No. 235 永眠記念会特集号
秋季理事会報告

一般社団法人 シュバイツァー日本友の会会報

「輝き」としての生」「生への畏敬」を再考する

兵庫県 土屋 貴志



一. 三種類の生

誰が、誰として「生きていく」「もはや生きていない」かによって、「生きていく」「もはや生きていない」の意義は異なる。

「誰」には、「私」(一人称単数)、「彼/彼女/それ」「たち」(二人称単数/複数)、「あなた」「たち」(you) (二人称単数/複数)の三種類がありうる。(M・ブーバー『我と汝』などを参照)

二. 生とは？(「彼/彼女/それ」「たち」の生、客観的に見た「生」)

「彼/彼女/それ」「たち」とは、「私」にとつて、その存在が自分とは距離のある第三者(他者)であるという関係を表現している。「彼/彼女/それ」「たち」は「私」の観察(アリストテレスのいう「テオリア」)「観察(観察)の対象である。観察する際には「客観化」、すなわち自己意識(「私」)による対象化が行われている。

客観的な観察において、対象である事象は、

観察された通りに「〜である」「〜となる」等と記述される。その際、記述された事象自体には、プラスの価値もマイナスの価値もついていない。価値づけを行うのは、観察を行っている生命体、すなわち生きていく主体の側である。

なお、自己意識(「私」とは、自己自身をも対象化している意識である。したがって、一人称の「私」と三人称の「彼/彼女/それ」「たち」は、同時に生成する。

ところで、「もの」と「こと」は異なる。「もの」とは物質や物体であるのに対し、「こと」は「もの」の性質や働きである。それゆえ、「もの」がなければ、「こと」は存在しない。

また、同じ「ある/ない」という言葉を使った表現でも、存在の有無を示す「〜がある/〜がない」と、性質や働きの有無を示す「〜である/〜でない」は、まったく意味が異なる。「〜である/〜でない」は、ある「もの」が存在し、その「もの」が、特定の性質や働きをもつか否かを記述している。したがって、「もの」が一切存在しないなら、「〜である/〜でない」ということはありえない。

生命体(生きもの)と生(生きていくこと)とは異なる。生とは、生命体(生きもの)の

「働き(活動)」である。すなわち、生は「もの」ではなく「こと」である。

客観的に観察された生とは、彼／彼女／それ「たち」としての生である。それは、「彼／彼女／それ「たち」としての生命体の「働き(活動)」という「こと」である。生命体はもはや働かなく(活動しなく)なるほど損壊すれば、生という働き(活動)もなくなる。すなわち、生命体が生という働きを失った(もはや活動しなくなつた)のが「死」である。生命体の「働き(活動)」である生は、音楽の演奏、舞踊や演劇やスポーツのパフォーマンス、花火のきらめき、などと同じ類に属する。それは、二度とない、一回限りの、「かけがえのない」ことである。

生命「体」という「もの」が輝くのではない。生という「こと」自体が「輝き」である。生命体が損壊し、もはや働く(活動すること)ができなくなる時、生は失われ、「死ぬ」。生命体の働き(活動)にほかならない生が、生命体を離れて存在することはありえない。したがって、物質によつて構成される生命体とは別個に存在する「魂」「霊」「生氣」などというものはない。「魂は、受胎以前から存在し、身体が死んでも生き続ける」という、古くから根強い考えは、誤りである。

心や意識や自己意識は、生命体の働きである。生命体を離れて心や意識や自己意識はありえない。したがって、生命体が死ねば、心も意識も自己意識は失われ、「私」は存在しなくなる。

三、「私」の生

「私」(自己意識)とは、「この」身心のことである。「私」の生とは、「この」体感として意識されている「こと」である。「私が死ぬ」とき、「この」体感的に意識されている「こと」はなくなり、「私」からみた「私」にとつての世界もなくなる。

「私」が生きていることは、客観的に見れば、宇宙における単なる一つの事象であり、よいことでも悪いことでもない。客観的には、「私」は「ただ生きている」こと以外の何ものでもない。「私」がいま生きているのは、たまたま生まれてきて、これまで死ぬような目にたまたま遭つていないからにすぎない。つまり、「私」の生自体が、客観的に「尊い」ことも、客観的に「悲惨」なことも、ありえない。

にもかかわらず、なぜ「私」の生は、「尊い」ことであつたり、「悲惨」なことであつたりするのか。それは、「私」がそう価値づけるからである。

「私」は、誰であつても、現に生きているし、生きている以外のありようをすることはない。すべての「私」は、生きているというこの「外側」に出ることはできない。だからこそ「私」は、生きていることを、「悲惨な」ことよりは「尊い」ことにしたいし、すべきなのだ。「私が死んでいる」および「私が生きていない」とは、いずれも「私が生きていない」ということである。「私」にとつて「生きている」とは、生を体験していることにほかなら

ない。すべての「私」は、死に瀕し意識が途切れるまで「生きている」ことを体験し続ける。それゆえ、死んだ後も「魂」として残ると想定してしまう。

すべての「私」は、気づいたときには、もう「生まれている」。誰も自分の生まれかたを選ぶことはできない。それだけでなく、誰も自分の死にかたを選べない。なぜなら、すべての「私」は、自分の意思の力(「自力」)で死ぬのではなく、「私」の身体を回復不可能なまでに損壊する、自分の意思では制御できない力や反応(「外力」)によつて死ぬからである。「自殺」とは、そういう「外力」を招くことにすぎない。死にゆくときの身体の反応を自分で制御するという意味で「自力で死ぬ」ことは、誰にもできない。

「私」が生きていない(生まれていない、死んでいる)という事態は、けつして体験し得ない。自分が死んでいく(生きているのが終わっていく)のは途中までは体験できるが、「死に終えた(死んだ)」ときには、体験する「私」はなくなつていく。いわば「いつのまにか死んでいる」のだが、本人はもはやそのことに気づくこともない。

したがって、エピクロスの言うように「死はわれわれにとつて何ものでもない。[中略]われわれが存するかぎり、死は現に存せず、死が現に存するときには、もはやわれわれは存しないからである」。

にもかかわらず「私」が死を恐れるのは、ま

ず、「自分がいない」とはどういうことかを知り得ないからである。知ることが絶対にできず、想像の域を完全に超えているから、死は恐れの対象になる。また、「自分がいない」という点では「死んだ」と「生まれていない」は同じだが、いま生きている「私」にとつては、「自分がいなくなる(失われる)」ということが、しばしば耐えがたく、恐ろしいものに思われる。

三十一 自殺容認論を反駁する

現実には自殺を図る人の多くは、苦しく辛い気分を制御できない「うつ」の状態に陥つていると思われる。そのようなぎりぎりの状態にある人にとっては、自殺を図る理由の正当性を検討することに意義はないかもしれない。

だが、一方で、「人には『生きる権利』があるのと同様に、『自ら死を選ぶ権利』もある」とか「自殺してもよい正当な理由がある」と公言する人々がいる。以下では、こうした「自殺容認論」の反駁を試みる。

上述したように「自殺」(自死、自決)とは、投身や縊首や服毒や自傷などにより、自分の身体を損壊する「外力」を、自分で招くことである。だが、死んでいく過程自体を制御することはできない。

「ただ生きるのではなく、よく生きるべき」という考え方があふ。しかしこれは、比較すれば「ただ生きる」よりも「よく生きる」ほうがよいと言っているだけで、「ただ生きる」

ことがそれ自体としてわるいと言っているわけではない。「よく生きる」の反対語は「わるく生きる」であり、「ただ生きる」ではない。まして、「ただ生きていていただけなら意味がなく、死んだほうがまだ」と考えるのは誤りである。生きること自体は「よく(わるく)生きる」ための必要条件であり、そもそも生きていなければ、よく生きることとわるく生きることもない。

「死にたい」というのは「この辛さや苦しみから解放されて楽になりたい」という意味であることが多い。「辛い」「苦しい」「耐えられない」ということは、いくら叫んでもよい。「安楽死」を実行する団体への登録がその表現であれば、それも構わない。だが、本当に死んだときには、苦しみから解放されて楽になつたことを経験する主体がなくなつてしまったがつて「死んだら楽になれる」ということはありえない。「死んだら楽になれる」と考えるのは、苦痛から解放され「楽になつた私」が、死んだ後に存在すると考えているからだ。しかし、死んだらそもそも「私」は存在しなくなる。

死ぬことは「眠り」でも「休息」でもない。死ねば、眠つたり休んだりする主体そのものがなくなる。にもかかわらず、私たちはなぜ、死後も「私」が存在していると考え、「死んだら楽になれる」と考えるのだろうか。それはまさしく、私たちが「生きていて」以外のことは考えられず、想像もつかないからである。

また、これから来ると予想される苦痛や、排便等を他者の世話になるなどの「生き恥」を回避したいがゆえに、自殺を図る場合もある。しかし、実際に体験してみると、苦痛や「生き恥」はそれほどひどくなく、予想が間違っているかもしれない。にもかかわらず、そうした予想は、死んでしまえば間違っていたとしても確認できない「反証不可能」なものであるがゆえに、人口に膾炙し続けている。

そもそも、本当に苦しいときは、その苦痛に対処するのに精一杯で、苦しいこと自体を悲観したりする余裕はない。また、「生き恥」と表現された生活を送っている人たちが実際にいるにもかかわらず、そうした生活を「恥」と公言するのは、その人たちに対するヘイトスピーチにほかならない。

また、自殺すらできる「勇氣」を誇示したいとか、回復できないダメージを他人に加えたいとかいう動機もありうる。だが、そうした理由は、「私」の生が消滅すること自体は認めているかもしれないが、「他者の心の中で自分が生き続ける」ことを願っている。すなわち、自分が世界のどこにも存在しなくなることは想定していない。

もつとも、「そもそも自分という存在をこの世界から消したい」という理由から自死を望むこともある。この理由は、死後に自分がどこにも存在しなくなることを自体を求めているので、もはや反駁することは困難である。そういう人に対しては、『いなくなりたい』と

思えるのも、生きて(存在して)いるからだよ。最初から「生きて」いなければ、いなくなりたいと思うこともできないんだよ」ということくらいいしか言えない。

四、「あなた「たち」の生

「あなた「たち」は、「私」と「顔と顔を向き合わせる関係」にある。私が「あなた「たち」」と呼びかけても、相手にとつて私は「彼女」でしかないこともありうる。しかし、互いに「顔と顔を向き合わせる関係」であれば、両者は「愛する人」「かけがえない人」になる。

「あなた「たち」の存在は、身体を通して知られる。「あなた「たち」は、たとえ「脳死状態」のような場合でも、その身体が働いて(活動して)いる限り存在する。だが、その身体がもはや働かない(活動できない)ほどに損壊すれば、生は失われ、「あなた「たち」は「いなく(亡く)なる」。

にもかかわらず私たちは、「あなた「たち」」と呼びかける大切な人「たち」が、亡くなった後もどこかに存在し続けていてほしい、と願ってしまう。それは「魂」の存在、およびその不死を信じるに至る動機になる。

五、「生への畏敬」の「生」をこらえなおす

周知の通り、シュバイツァーは、その「文化哲学」の中心をなす思想として「生への畏敬」を提唱した。「文化」とは「個人と集合体

との進歩、物質的精神的進歩である」。「文化はその本質上二面的である。それは理性が自然を支配するとともに、人間の志向をも支配することによって実現される。この二つの進歩のうち、どちらが大事であるか。それは目だたないほうの進歩、すなわち、理性が人間の志向を支配することである」^四。「理性が人間の志向を支配するということは「中略」個人と集合体とその意志を、全体や多くの人の物質上精神上の幸福によって規定されること、すなわち、個人と集合体が倫理的になることである」^五。

こうして、倫理の重要性が説かれる。「真の現実感覚は、わたしたちが倫理的な理性理想によつてはじめて、現実と正常な関係にはいるのだということを見抜くことである」^六。

そして、文化の再生は、世界観の革新によつてもたらされる。「わたしたちが文化世界観をとりもどして、そこから文化的志向を生み出すことさえできれば、文化は再建される」^七。世界観とは、「社会と個人が、世界の本質ならびに目的について、世界における人類と人間の位置ならびに使命について、いだいている思想の総体である」^八。世界観は「思考する世界観」^九でなければならず、それは「楽観論的倫理的でなければならぬ」^{一〇}。この「楽観論的世界観とは、存在を無よりも高く評価したがって世界と生とをそれ自身価値あるものとして肯定する世界観である」^{一一}。

ところで、「わたしたちは世界と生の肯定

を、それ自身必然的な、価値あるものとして、体験している」^{一二}とシュバイツァーはいう。「世界と生の肯定は、わたしたちの生への意志のなかに与えられている」^{一三}。

こうして、私や人類のみならず、あらゆる生命体が「生きようとする生命」であるという認識に到達する。「真の哲学は、最も直接的で最も包括的な意識の事実から出発しなければならぬ。すなわち「わたしは、生きようとする生命にとりかこまれた生きようとする生命である」という事実である」^{一四}。

ここから、「生への畏敬」の倫理が提唱される。「それゆえ倫理は、わたしが、自己の生に對すると同様な生への畏敬をすべての生きようとする意志にさざげたいという要求を体験することにある。これによつて、道徳の根本原理は与えられたのである。すなわち生を保持し、生を促進するのは善であり、生を破壊し、生を阻害するのは悪である」^{一五}。

私は、こうしたシュバイツァーの「生への畏敬」の「生」を、「もの(生命体)」ではなく、生命体の「働き(活動)」としての「こと」として捉えたい。そうすると、「生きんとする生命」とは、生命体が、働いて(活動して)おり、働き(活動し)続けようとしている「こと」だ、と解釈できる。

上述したように、生命体は、生き「てい」ることしか意識できず(死は知り得ず)、生き「てい」ることしか思うことができない。生命体は、その働き(活動)がもはや維持できない

いほど、身体が損壊し死ぬまで、自分は死な
ず生き続けると思っている。これが「生きん
とする」ということの内実だと考えられる。

本稿では、生は「こと」であるという点を明
確にするため、「もの」(生命体)であるという
誤解を招きやすい「生命」という言葉は基本的
に用いず、もっぱら「生」という言葉を用いる。
エビクロス『メノイケウス宛の手紙』ディオ
ゲネス・ラエルティオス『哲学者伝』第十卷分
節番号一二四、一二五。

『文化の頽廃と再建(文化哲学第一部)』国松
孝二訳、『シュヴァイツァー選集』第六卷、白
水社、一九六二年〔原著一九三三年〕、一七六頁。

同、一七七頁。

同右。

同、一九四頁。

同、二〇七頁。

同右。

同、二二一頁。

同、二二六頁。

同右。

同、二二三頁。

同右。

『文化と倫理(文化哲学第二部)』水上英廣訳
『シュヴァイツァー選集』第七卷、白水社、一
九六二年〔原著一九三三年〕、二七九、二八〇
頁。

同右。